

公益財団法人 日本骨髄バンク 第70回 業務執行会議 議事録

開催方法：コロナ禍の影響により WEB 会議形式で開催

(本会議を WEB 開催することに関して全理事の同意を得た)

日 時：2020 年（令和 2 年）9 月 11 日（金）17:30～19:00

出 席：小寺 良尚（理事長）、加藤 俊一（副理事長）、佐藤 敏信（副理事長）

大久保 英彦（理事）、金森 平和（理事）、鈴木 利治（理事）、高橋 聡（理事）

谷口 修一（理事）、橋本 明子（理事）、小野 高史（監事）、梶村 岳央（監事）

欠 席：浅野 史郎（理事）、高梨 美乃子（理事）

事務局：五月女 忠雄（事務局長）、渡邊 善久（総務部長）、小島 勝（広報渉外部長）、

小川 みどり（移植調整部長 兼 新規事業部長）、折原 勝己（ドナーコーディネート部長）

竹村 肇（総務部）、上原 淳（総務部）

順不同、敬称略

1) 開会

小寺理事長が冒頭に「COVID-19 蔓延下における日本と世界の同種造血幹細胞移植」に関して発表した。

2) 業務執行会議の成立の可否

業務執行会議運営規則第 6 条により本業務執行会議が成立した。

3) 議長選出

業務執行会議運営規則第 5 条により業務執行会議の議長は理事長があたるとされ、小寺理事長が議長に選出された。

4) 議事録署名人の選出

議事録を作成するための議事録署名人は、業務執行会議運営規則第 8 条により議長と出席した副理事長が記名押印する。小寺理事長と加藤副理事長、佐藤副理事長がこれに当たるとされた。

5) 議事録確認

前回（2020 年 7 月 10 日）の業務執行会議議事録案を全会一致で了承した。

[議 事]

6) 報告事項（敬称略）

(1) 全国大会 WEB 開催とビデオメッセージ制作進捗状況

小島広報渉外部長が資料に基づき説明した。

骨髄バンク応援メッセージ動画「ツナガル、イノチ。」を 2020 年 9 月 17 日に公開する予定である。公開方法は骨髄バンクの公式 YouTube チャンネルである。公式 Twitter、LINE などで短編版を公開して公式 YouTube チャンネルの本編を観て頂くように誘導したい。10 名にご出演いただいた。本編は 5 分 55 秒で、BGMには出演者である岡村孝子氏（シ

ンガーソングライター)の「夢をあきらめないで2011」を採用した。

【ビデオメッセージを上映】

(主な意見)

- ＜橋本＞ 最初は若い人ばかり登場したが、北別府氏が出てきてすごく良かった。ドナーは「若くて綺麗な人にだけ提供する」という夢を見る人も多いかもしれない。でも北別府氏の頑張り、「今、生きているぞ」という感じが気に入った。
- ＜加藤＞ 大変感動した。これまでも「このようなこと(メッセージ集の制作)はできるはず」と思いながらも今回ようやく実現したことで今後につながる。広い層からメッセージをいただいた。これを順次、数を増やしながら、また期間を延長しながらWEB動画を通じた発信をできればよいと強く思った。広報渉外部の努力に感謝し、今後も期待している。
- ＜大久保＞ メッセンジャーを10名に絞ったが、準備委員会で候補者リストを見た時、果たしてこれだけ(協力してくれて)映像になって送られてくるのかと心配した。広報渉外部の頑張りによりこれだけの映像に仕上がった。「お疲れさまでした」と御礼を申し上げる。色々な場面でPRに活用してほしい。
- ＜鈴木＞ 大変立派な映像で、なるだけ多くの人に観てもらう方法を考えてほしい。北別府氏が現役時代に、ジャイアンツ戦で力投した場面がまざまざと脳に浮かぶ。メッセージ画面からは非常に厳しい様子がうかがわれるが、このように闘病している人が(移植によって)救われるという点をアピールしてほしい。こうした映像はACではなかなか使えない。期間限定だが、たくさんの人に観てほしい。
- ＜梶村＞ 非常に感動した。鈴木理事がおっしゃったように視聴率を高めることが本当に大事だと思う。私も、東京海上日動火災の人事部や社内広報部署へ連絡して社内アナウンスができないか考えてみたい。またドナー休暇制度を導入している企業は現在600社以上ある。視聴率を高める観点で休暇制度導入企業に一斉メールするなどコンタクトしてみてもどうか。私と同じように考える企業もあると思う。

続けて小島広報渉外部長が資料に基づき説明した。

「骨髄バンク推進全国大会2020 WEB版」に関して説明する。今年は広島で開催する予定だったがコロナ禍により式典やイベントは中止となった。代替策として公式ホームページに「全国大会2020 WEB版」を開設した。全国の方々に「ありがとう」と「希望」のメッセージを届ける内容になっている。理事長の挨拶、メッセージ動画、事業報告を掲載している。広島のボランティアから、2022年広島開催に向けたメッセージも掲載している。地区普及広報委員、説明員、広島ドナーバンク、広島国際大、日本赤十字広島看護大、山陽女子短大の皆様からメッセージをいただいた。公開はメッセージ動画と同じく2020年9月17日で10月末まで掲載する。

(主な意見)

- ＜小寺＞ 今回はWEBで、再来年2022年に広島で開催するということが決まっているのか。
- ＜小島＞ 来年2021年は30周年で東京・霞が関のイイノホールを予定している。2022年は今回中止になった広島を予定している。

(2) 30周年記念大会企画進捗報告

渡邊総務部長が資料に基づき説明した。

当法人 30 周年記念大会を 2021 年 10 月 2 日にイイノホールで開催する。イイノホールは大久保英彦理事にも現地視察していただき予約済みである。築 10 年も経っていない新しい施設で、地下鉄霞ヶ関駅直結と交通至便である。また厚生労働省の斜め前という立地である。キャパシティは 500 名。「3密」を避けるため 300 名程の参列を想定している。プログラムは通常の全国大会と同様に記念式典、講演、シンポジウム、イベントといった形を予定している。2021 年 3 月に理事会が開催されるので（開催半年前の）この時点で「ライブ開催」か「関係者のみの無観客WEB開催」か、また別の形にするのか判断したい。大会後の記念パーティー用にイイノホール内スペース（150 人規模）を予約している。イベント企画以外の喫緊の課題として、記念誌編集、厚労大臣等への臨席や祝辞の依頼がある。記念誌編集はすぐに、臨席依頼は来年早々に始める。職員が名刺交換する際に 30 周年をアピールできるよう「30 周年記念名刺」も作成する。職員の士気を上げる意味でも有効である。LINE や Twitter など SNS による大会事前告知も予定している。コロナ禍の影響が続いて（ライブ形式の）イベントが開催しづらい状況であり、SNS を活用した告知を考えていきたい。またメディアを使った事前PRも検討する。テレビCMを打つほどの予算はないが、2021 年前半に何らかの形で事前PRをしたい。運営スキームとしては運営本部を広報渉外部に置き、準備委員会を大久保理事、事務局長、各部長で編成している。現在月 1 回程度ミーティングをしており、次回は 9 月 24 日に開催する。

(3) 一元化システム医療機関支援機能の進捗状況報告

小川移植調整部長兼新規事業部長が資料に基づき説明した。

「造血幹細胞移植支援システムの医療機関支援機能」に関して、現場の医師が使う画面を構築中である。資料には「2020 年 10 月からスタート」とあるが、これが 1 か月以上延期になる旨の連絡が本会議直前に入った。稼働時に何ができるかをお伝えする。コーディネート進捗管理で使う画面で、移植医師（学会が認定する診療科の所属医師）だけが使う。主な機能を列挙する。1. 患者登録、臍帯血も含めて患者情報を入力できる 2. ドナーの検索結果を取得して、希望するドナーを画面上で選ぶことができる（最初の 10 名のみで、その後からは現行通り FAX でやりとり）3. 登録中の患者一覧や患者情報を参照できる 4. 統計であるがまだ提示されていないので詳細は不明 5. 各認定診療科でユーザー登録する。これは診療科責任医師がユーザー登録画面を使い登録する。

(主な意見)

<小寺> 日赤、厚労省、当法人の三者で詰めている。不具合があり、10 月開始が延期になった。なるべく早く不具合を直して稼働させてほしい。登録中の患者一覧というのは具体的にどのような形で出てくるのか。全国の患者が出てくるのか。

<小川> 自分の診療科に登録中の患者のみである。

<小寺> 使えるのはユーザー登録した人だけということか。

<小川> その通りである。

- <金森> 「最初の10名のみでその後は現行通りFAX」ということだが、10人までの登録で患者の何パーセント程度をカバーできるのか。
- <小川> 10人選んだドナーから移植に到達する率は正確には分からない。振り返ってみた時に10人のドナーを進めた中から移植を受けたという患者が一番多い。
- <金森> せっかくペーパーレスになるので、ちょっと残念である。
- <小寺> 当法人の意見として次回の会議で反映して欲しい。
- <小川> 初回だけでなくそれ以降もシステムで選べるようにという理解でよいか。
- <小寺> そうである。今日の業務執行会議の意見として提示してほしい。

(4) お手紙交換WGの進捗状況報告

小川移植調整部長兼新規事業部長が資料に基づき説明した。

2019年から手紙交換制度WGを設置していたが、コロナ禍で一時休止していた。改めて仕切り直して、残った課題を議論していく。現場に近い人たちの意見を聞きたいということで、ドナーコーディネーターや移植施設のHCTCにも加わっていただき議論を進めていく。第1回目は来週9月16日。理事の皆様は随時報告しつつ報告書をまとめる。

(主な意見)

- <小寺> 非常に大事なWGで、結論を早く出してアクションに移れるように願います。座長は橋本理事に願います。鈴木理事がアドバイザーということで、理事会から2名入って事務局担当者として進めていく。辞令交付も考えたが以前は辞令無しだったので「理事長からのお願いかつ理事会での合意」ということにしたい。
- <橋本> SNSを使えばドナーと患者のペアリングが簡単にわかる時代というのが前提である。現場の人たちと十分に討論して、具体的な範を示していけたらと思う。座長として急いで進める。

(5) コロナ禍 職員ガイドラインの編集進捗報告

渡邊総務部長が資料に基づき説明した。

2020年3月から半年以上に及ぶコロナ禍の中で、中央事務局と全国の地区事務局は管理職や主要任務を担う基幹職員を軸に1日も休まず営業を継続してきた。幸いにして職員や職員家族から今のところ罹患者は出ていない。ただ第2波、今後の流行下で仮に罹患者が出た際にどう備えるのかという点を（今まで内部通達という形だったが）理事の皆様にご覧頂きたくまとめた。本ガイドラインは、一般的な内容しか書かれていない。罹患者が出た際に「地区事務局の閉鎖」をうたっている箇所もあるが、これはあくまでも可能性、仮定の話である。最悪の場合、たとえば2人の地区事務局で2人とも罹患した場合には当該事務局を閉鎖して他地区でカバーする。最後の「その他」に関して補足する。コロナ禍によりマイナス事象が多かったが、要員配置や勤務体制の柔軟な運用といった前を進むような業務改善もあった。WEB会議導入も同様である。

(主な意見)

- <小野> 私は今、東京医科大学に勤務している。院内感染や職員感染の防止ということで、同様のマニュアルを作り職員に徹底している。本ガイドラインは非常によくできているのでこのままで構わない。参考意見だけ申し上げる。2 頁目「職員の心得」である。冒頭に「新型コロナウイルス感染を避けるため」の後に「3 密回避と手指衛生を意識して以下の基本動作を徹底する」としてはどうか。感染制御の医師の話によれば、「院内感染を防ぐには手指衛生に尽きる」ということで、医療スタッフはものすごい回数の手指衛生をしている。我々もそれを参考にしている。もう 1 点は勤務中の⑩で「マスクを外して食事する際、対面を避け、会話は極力控える」としてはどうか。病院職員もスタッフ同士で食事しているときに対面になったり、油断してしまう。従って病院の職員食堂も「対面」はやめて全員が横並びになるように変更した。対面を避けることが大事だ。
- <小寺> 病院の食堂の座席は対面を避ける配置にしているのか。
- <小野> 職員用のかかなり大きい食堂があり、以前は対面もあったが今は全部横並びになった。病院スタッフはそれぞれの休憩ルームで休憩したり食事したりする。そこでも油断すると対面になるので、斜めないし横向きになるように徹底している。
- <小寺> 手指衛生と 3 密を避けるというのは大事だと思う。
- <谷口> 小野監事の指摘は適切である。自分も 2 点指摘したい。1 点目はソーシャルディスタンスという言葉で、今年の流行語大賞候補になるくらい浸透している。そもそもマスクをしない国で生まれた言葉で「マスクをしない状態で距離をとれ」ということである。ではマスクをした状態でどれくらいの距離をとればいいのかという点は、日本では検討されていない。解釈が難しく例えばマスクした状態で電車内で 1m 以上の距離をとるのは不可能。それでも感染はほぼない。記述を変える必要はないが、職場の中で矛盾が生じる可能性がある。2 点目、マスクと食事である。東京医科大も虎の門病院も同じ状況である。対面でなくてもマスクをせずに会話をすると濃厚接触という点でアウトである。実際に起きたことだが、ある施設から見学に来られた先生がいて（その時は発熱なし）2 日後にコロナと判明した。見学者を職員食堂に連れて行き、マスクを外して「まったく会話しない」という訳にはいかない。そこで普通に会話をして罹患して 2 週間出勤停止となった。その措置は間違っていなかったと思うし、会話を極力控えるということによい。コーディネーターはドナーと話をするしマスクを外して会話するのは（相手が感染者であれば）かなり危ない状況である。
- <小寺> 虎の門病院職員と見学者が会食した際、椅子の配置はどうだったか。
- <谷口> すべて対面にならないようにしてある。マスクを外した状態で横か斜めを見るかの状態で会話をしている。それでも濃厚接触とみなしている。
- <小寺> 接待した人と接待された人は、どのくらいの時間会食していたのか。
- <谷口> せいぜい 10 分程度と思う。これで 3 人出勤停止になって本当に参った。
- <小寺> 参考になる。濃厚接触のファクターの 1 つに時間があるのかと想像していたが、今回は短時間だったのか。
- <谷口> その通りである。もちろん濃厚接触というのは国の定義があるが、私の病院は独自に判断して 3 人は 2 週間出勤停止になった。

- <加藤> 質問と確認が3点ある。中央事務局、地区事務局における⑧パーティションやビニールカーテンを適宜設置するとあるが、今は事務局の職員同士の隔壁はどのようにしているのか。
- <渡邊> 中央も地区事務局も配置している。もともとパーティションがあった部署は新規導入していない。パーティションがなかった部署はアクリルまたはビニールカーテンのような形で濃厚接触にならないように配置している。
- <加藤> マスクと併用すれば、勤務中の感染を非常に減らせると思うので徹底して欲しい。2つ目、職員の食事は自分のデスクでしているのか、それとも食事のためにどこかに集まるのか。
- <渡邊> バンクに職員食堂はないので、外に食べに行く者、自席で食べる者、会議室で食べる者の3パターンに分かれる。
- <加藤> 一番危ないのは会議室だと思う。会議室の中はビニールカーテンやパーティションで仕切られているのか。
- <渡邊> 今自分が座っているこの会議室が昼食場所である。パーティションはない。
- <加藤> マスクをしないで食事をして、唾液が出て飛び散って、無防備で飛び散った唾液を受け取るのが最大の問題だと思う。今すぐに対策した方が良い。3つ目、手指衛生についてアルコール消毒には限界がある。石鹸を使い水で洗い流すのがもっとも確実とされている。事務局の水回りは十分にしているのか。
- <渡邊> 消毒液や手洗い用資材は十分に確保している。基本動作として、手指衛生を徹底するようにアナウンスしている。
- <加藤> 各部屋に水道を設けるのは無理だと思うが、職場から一番近いのはトイレか。
- <渡邊> その通りである。
- <加藤> トイレに人が集まると別の問題が出てくると思うが、流水が一番確実だと思う。水道増設はすぐには無理と思うが、専門家に聞けば良い智恵があるかもしれない。
- <小寺> 会議室で複数の人が昼食を食べる場合、机の配置を（一般的なコの字型口の字型でなく）教室のようにスクール形式にしてはどうか。パーティションは必須なのか。小野監事の病院ではどうか。
- <小野> 食堂にパーティションはない。病院の初期研修医は休憩部屋があり、そこはかなりの人数が入る。そこで食事をしたり休憩をしたりしている。横並びに加えてパーティションも使っているように見受けられる。もし徹底するならパーティションを入れるべきだ。
- <加藤> 骨髄バンクの会議室は非常に狭い。その会議室の自身の経験から考えるとなかなかパーティション無しでは難しい。パーティションが設置できるまで、コの字型でも口の字型でも中側に人が入って外向きにみんなが食事をすれば感染の恐れはより少なくなる。
- <小寺> （食事のたびに）パーティションを置いたり取り払うのは大変だと思う。私の知っている職場でも、会議室の机を昼食時だけ背中を向けるよう並べ替えている。
- <大久保> 職員はマスク着用など罹患防止策を徹底しつつ業務している。ガイドラインにより基本動作がはっきりした。ただあまりに過剰に反応し過ぎて（事務局閉鎖や自宅待機など）業務が滞らないように進めて欲しい。

(6) 調整医師の新規申請・承認の報告

折原ドナーコーディネーター部長が説明した。

令和2年7月8日から8月31日に新たに申請・承認された調整医師の人数は15名、合計で1152名である。

(7) 寄付金報告

小島広報渉外部長が説明した。

7月分と8月分を一括報告する。7月の寄付は件数1569件、金額は1628万3490円となっている。件数も金額も昨年より大幅に増えた。「骨髄バンクNEWS」を毎年7月に発行して寄付金のお願いをしている。その効果が反映されている。8月の寄付件数は958件、金額は1810万1252円。4月から8月までの累計は4270件、5327万6706円。8月は1800万円を超えた。患者家族から850万円の遺贈があった。亡くなった父親の親族から「白血病で亡くなった父親の意思」という連絡があった。またフジトク株式会社から100万円の寄付があった。東京北区の工学部品メーカー（70名規模）で今回初めての寄付だった。

(主な意見)

<小寺> コロナ禍でも多額の寄付をいただき大変ありがたい。

(8) 移植件数報告

渡邊総務部長が資料に基づき説明した。

4月から8月までの国内移植件数は396件、海外も合わせた総数は399件。今年の推移をグラフにした。昨年8月までの国内累計は532件。昨年比で130件ほどのマイナスとなっている。コロナ禍の影響で減少傾向にあるが、9月10月で戻る予想である。現状のマイナスを通年でどれだけ埋められるかが焦点になる。移植件数は「営業をかけて増やす」というものではないので注意深く動向を見る。

(主な意見)

<加藤> 累計移植件数は現在2万件超ぐらいか。来年の30周年におおよそどれくらいに到達するのか。切りの良い数字に達する見込みはあるか。

<折原> 2020年7月末現在で2万4553件である。

<加藤> 冒頭の理事長の話に関して質問する。コロナ禍で深刻な被害を受けたスペイン、イタリア、イギリスの数字が紹介された。他の欧州、たとえばドイツやフランス、また米国（NMDP）などの情報はお持ちか。

<小寺> 自分が参加したのはEBMTなので、ドイツ、フランス、NMDPの報告はない。

<加藤> 今後、情報が入ってきたらぜひ教えて欲しい。G-CSFについては今のところ、心配すべき事案は起こっていないということで安心した。しかし疾患を持った方で3例も出ているということは、疾患を持っていない方で「出ない」という保証はないと思う。数が増えればいずれ何がしか出てくるのではないかと懸念する。ドナー安全委員会でPCR検査に関して議論していると思う。

- <折原> ドナー安全委でPCR検査導入を検討して、現在報告書をまとめている。結論としては「採取施設の判断」とした。PCR検査はその時点での感染を判断するものであって、それ以降に感染をしているかどうかを確認できるものではないということと、入院時にPCR検査をする施設がかなり増えてきたころから採取施設の判断に任せることとした。
- <加藤> 小川部長にお聞きする。これまで業務執行会議に合わせて毎月コーディネート状況が提示されていた。8月はどうか。
- <小川> まだ数は出していない。業務上の感触では選定件数も以前の水準に戻っている。ドナーがコロナ禍を懸念して終了になったりした件数が何パーセント増えたか、または同じかといった数字を報告してきたが今後も報告すべきか。
- <加藤> 毎月お願いできればと思う。どのような推移になるのか私たちはまだ見極めていないと思う。短期的に1年、中期的に5年と順次考えて進めなければならないものである。最後に中期的な問題である。臍帯血の見通しでは妊婦がコロナ禍での分娩を不安に思い、分娩数が激減する。2020年後半から2021年前半にかけて分娩数が丙午（1966年）ほどの落ち込みになるのではと予想している。得られる臍帯血の数も同様に減る。骨髄バンクでの（需要の）落ち込みを臍帯血バンクが今後も吸収できる状況にあるのかどうか。臍帯血バンク側で研究班があるが、そこで早急に研究していただければと思う。理事長の情報でもわかる通り、ハプロ移植はかなり伸びるだろう。そのことも含め日本における造血間細胞移植の当面の在り方と、長期的な在り方を今後議論しなければいけないのではと思う。
- <小寺> 海外と日本とは事情がかなり違う。EBMT報告を聞いているとバックアップとして臍帯血をとるが、ほとんど使われない。海外の臍帯血バンクは有事のときには有用なのだということをむしろ強くアピールしている状態である。日本は臍帯血でカバーされているが、欧米ではそれが見られない。したがってハプロ移植するところが増えている。もう一つ、日本ではバンクドナーからの凍結した細胞は全部使われている。海外では注文したにもかかわらず、使わない場合がかなり多い。そこが日本とかなり違う。背景はもうちょっと見ないと分からない。

以 上